

『六匹侍 Spring 大行進 (2001.04.18 in Zepp 東京)』ライブ・レポート

text by KRAFT.WARTZ

kashi no kai

今年はライブをいっぱいやります！と宣言した我らがムーンライダーズ。

その公約通り、春のツアー、「六匹侍 Spring 大行進」が4月15日、福岡のイムズホールを皮切りに、大阪、東京と全国3カ所で賑々しく行われた。名古屋飛ばしとか、白河の関は越えてくれないとか、四国、沖縄にはなかなか来てくれないとか、列島各地に様々な拘りが残った気はするものの、やはりムーンライダーズはライブが面白い、と改めて思った。予定されている？秋のツアーでは是非全国津々浦々のライダーズファンが、こういう思いを共有出来ることを期待しつつ、ツアー最終日、4月18日(水)の東京公演の模様を報告したい。

ステージ構成としては、大仕掛けがあるわけでもなく、MCというMCもほとんどなく、確か慶一氏の「サンキュー、ベリー、ベリー、ベリーマッチ」というのが唯一の発言だったと思う。最近にしては無口なステージだったのではなかったか。とにかく次から次へ演奏をぶっ飛ばして、気がつけばアンコールをはさんで終わっていたといった案配で、バンドがバンドとして当たり前のように演奏に終始していた感が強かった。時間にして2時間強くらいだったか。

今回披露された楽曲は、はちみつぱいの『センチメンタル通り』を含め、ムーンライダーズとしても、割と初期から中期くらいにかけてのアルバムからが中心で、その合間に最新作『Six musicians on their way to the last exit』がフューチャーされるといった構成。比率から言えば静よりは動的な選曲が多く、太鼓屋オタクとしてはかしぶちドラムが炸裂していたので、実に納得な内容だった。

大仕掛けはなかったが、会場前のステージ上手には、一段高上げされた畳二畳分くらいの、ある意味怪しげな小さな舞台があり、そこには深紅の番傘がちょこんとライトアップされ鎮座坐していた。一見寄席か歌舞伎座にでも来たかのような雰囲気だったのであるが、ツアータイトルがタイトルだけに、ひょっとして、この小さな舞台にメンバー1人ずつ番傘片手に見得を切りつつ登場？いやひょっとして海老一染之助・染太郎師匠よろしく番傘の上で升を回して「マスマスご発展！」なんてシーンがホントに拝めるのだろうか、なんて思ったのはたぶんワタシだけだったろう。



さて、開演である。

1ベルが鳴り終わり、緞帳が開いたかと思ったら、ステージ両脇から「ボッ」という音と共に、炎が燃え上がった。と同時に客席からは驚嘆や笑いなど、戸惑いを隠せない反応が渦巻いた。そうこうしているうちにステージ中央後方に、懐中電灯を顎から照らすかのような格好で（ボクにはそう見えた）1人立っているメンバーが現れた。鈴木慶一氏であった。ここでも笑いが起こったが、それをよそに慶一氏が所定の位置に移動し始めたかと思ったら、他のメンバーも上下よりステージ所定の位置に向かった。

会場はまだ暗い。さぁ、いよいよ始まるゾ！



メンバーが所定の位置につくと、プログレっぽいインプロが始まった。コレはひょっとして「こうもりが飛ぶ頃」？とも思ったのだが、「火の玉ボーイ」と分かる頃にはステージはライトアップされ、メンバー自身を確認出来た。全員白を基調にした出で立ちで夏を先取りといった感じ。その布陣はステージ上手から、白井良明氏、かしぶち哲郎氏、鈴木博文氏、鈴木慶一氏、岡田徹氏、武川雅寛氏という具合。トンピクレンギター番長の良明氏は図ったように例の番傘ステージの前。何かやらかしてくれるだろう期待感を一心に集めていたような気がした。慶一氏はというと、作家中山あい子氏を彷彿とさせるサングラスにシルバー？ウィッグ姿、要するにカツラ、という善し悪しの判断が即座に出来ないちと異様な格好であった。慶一氏登場時に笑いがあったのはこの格好のせいかと妙な納得。下手後方に目を転ずれば、最新作のアルバムジャケットからそのまま出てきたかのような出で立ちの岡田徹氏。キャップを被っていたので表情はあまり伺えなかった。我らがかしぶちさんは着こなし、雰囲気などトータルに一番きまっていたか。いやコレは別に鼻屑しているワケではなくマジな話格好よかった。あの独特の磁場というか、日本語にかしぶちさんをうまく表現出来る言葉がナイのが口惜しいが。

メンバーそれぞれに目を見やるのと同時にインパクト強く我々の目に飛び込んできたのは、ステージ後方の紅白幕。これで桜でも咲いてれば、殆どお花見状態と言ったところ。（実は、ライブ後半くらいに、ステージ後方のホリゾンが白黒幕をイメージさせる演出もあったりして、冠婚葬祭取り揃えみたいな妙な空間が同居するシーンもあった）てな具合で幕を開けた六匹侍 Spring 大行進、東京編。ここからアンコールをはさんで終演まで一気に畳み込んでいったのであった。



印象に残った楽曲をメモしておく、まず「酔いどれダンスミュージック 東京音頭ミックス」。この曲もコロコロとスタイルを変えているが、数多いアレンジの中でも今回はまさかの「東京音頭」との融合ヴァージョン。曲中どうも音頭っぽい拍子だなあと思っていたら、ホントに東京音頭が出てきたのには驚いた。しかもそれと同時に良明氏が、番傘片手に音頭に合わせて例のステージで見得を切るというシーンが目の前に現出。期待通りの「演技」に会場は当然のごとく大盛り上がり。さすがギター番長、見得の切り方が実に天晴れだった。

次に「イスタンブール・マンボ」。今回のライブで一番ワクワクしたのがこの曲だった。ライダーズを聴きだして20有余年。恐らくライブで聴くのは初体験ぢやなかつたらうか。記憶が正しければ、であるが。久しぶりにアナログ盤の『イスタンブール・マンボ』を引っ張り出してみたのだが、ジャケットの帯に「6人のナイス・タフ・ガイが今宵誘うイスタンブール・マンボ」とあるのを発見。まさに今宵のライダーズはタフ・ガイそのもの。淡々と、しかし、演奏には表現力があってしかも力強さがある。そういや、この曲が発表されてから庄野真代が「飛んでイスタンブール」をヒットさせたっけ、なんて遠い目をしてしながら演奏に聴き入っていた自分。メンバーのソロ・プレーをフューチャーする所もあつたりして、それにしてもゾクゾクするアレンジだった。

さらに圧巻だったのが、「スカーレットの誓い All You Need is Love ミックス」。一見「？」であるが、要はオープニングから中盤くらいまでがビートルズの「All You Need is Love」に、「スカーレットの誓い」の歌詞が乗っかり、後半は楽曲・歌詞双方とも正真正銘怒濤のオリジナル「スカーレットの誓い」に移行していくという油断も隙も許されない待ったなしのヴァージョン。ライダーズとビートルズの親和性がこんなことでも証明出来るのかとただただ関心。ウィッグ姿の慶一氏はマッシュルームカット？をイメージしてたのかしらん。

最新作『Six musicians on their way to the last exit』からは「Public Cemetery」「アイスなぼくとアイアンなきみ」の他、慶一氏のルーズなサイド・ギターに先導された良明作品「あっ！何か聴こえる」が披露された。「pissisim a go go」や「kissin' you till I die」など今回のツアーに合わせて発売されたシングル盤からもしっかりと演奏がなされた。

それにしても今回のかしぶちドラムは、休憩なしのたたみかけていくステージ構成も手伝って、千切っては投げ、千切っては投げといった感じのパワーで、炸裂しまくっていた。楽曲によってはロータムとか、スネアが抜け落ちるんじゃないかと思うくらい重さも半端じゃなかった。ヴォーカリストとしてのかしぶちさんは「卒業」と「トラベシア」を披露する場面もあった。

アンコールは、「スカンピン」と岡田ヴォーカルによる「ウエディング・ソング」。ぶっ飛ばしつつ気がつけば、アンコールを含めて2時間強のライブであったが、「ウエディング・ソング」終了後、メンバー全員がステージ全面に一列に勢揃い。通常だったら、メンバー同士肩を寄せ合って手を振るとか、ファンに向かって深々とお辞儀をすとかあると思うのだが、各々立ち位置とポーズが決まると、全く動かずじまい。クジラ氏は番傘を右手に高々と掲げていただろうか。と同時に「ラム亭のテーマ ホタルの光」がBGMで流れ始め、曲のフェード・アウトにタイミングを合わせるかのように、メンバーも慶一氏から1人ずつステージから去っていき、ここに六匹侍 Spring 大行進は幕を閉じたのであった。

(櫻の会 KRAFT.WARTZ 01.04.24 up)

